

No. 1064

マンモス書道展

土曜日の午後、お母さんに手をひかれたちびっ子や自転車に乗った小学生が、次々に書道塾に集まって来ます。子供達の才能を伸ばそうと、今学習塾やダンス教室が大流行、なかでも書道は静がなブームとか。

こんな世相を反映してか、ある書道会がマンモス書道展を開きました。

1.500坪の大会場には、3600点の作品が展示され、いつもはせわしげに動きまわる人々が、心静かに筆字に見入っていました。

多摩川探訪

奥多摩の山脈から多摩川ははじまる。溪谷を流れる川は澄み、休日ともなると、家族連れや釣り人でにぎわう。そこは、人間に潤いをもたらす、自然の営みを教えてくれる。

多摩川は、また古くから、東京に住む人々の生活に欠かせない水を供給してきた。有形無形の利益を人間にもたらす、陶々と流れる多摩川も、武蔵台地の中流附近から自然破壊が目立ち始める。ここには、今も、多くの水鳥がすむ。しかし、年ごとにやってくる水鳥は減っている。6月1日、多摩川も、拝島から下流にかけてアユ解禁になった。天然のアユはとくに姿を消し、放流のアユも、進む汚染に解禁まえに死ぬ数が増えた。えさ場を求め、飛ぶ水鳥に、いつまで明日はあるのだろうか。東京都公害局は都内主要河川の水質測定結果をまとめ発表したそれによれば、大半の河川の水質が、改善横ばい傾向を見せているなかで、多摩川の中流域の水質が悪化し、シアンなどの有害物質も検出されたという。

六郷橋から下流は、工場地帯を流れ、東京湾に注ぐ。東京湾に最も近い大田区羽田、ここはかつて、漁師の町であり、にぎわいを見せていた。今は、ひっそりとした、たたずまいをみせるだけ。かつて白魚もとれたのだろうか。忘れられたように白魚神社が残っている。ここの漁師はほとんど陸にあがった。70才を越えた伊東老人も、去年、漁師をあきらめた。しかし海が忘れられず時折舟を出す。工場と、羽田飛行場の間をぬって舟は進む。潮の引いた羽田飛行場沖多摩川河口。そこで老人は、あさを掘る。真上をジェット機が通りすぎていく。

「昔はね、多摩川でいろんな魚がとれ商売ができた。うなぎ、穴子、ボラ、ハゼ……。しかし今は水が汚れて駄目だね。皆、死んじゃう。上流から家庭で使った水は処理してもくさっちゃうんだね。もうだめだね。」人間の生活に様々の利益をもたらしてきた多摩川は、今は人間の生活に汚されていく。多摩川の汚染原因を、東京都公害局は、工場排水もさることながら、中流域の宅地化が進み人工増による生活污水が増えたためとみている。大都会を流れる多摩川。よみがえることはもうないのだろうか。